論文紹介

がん登録資料を用いた高齢者前立腺がんの生存率の分析

伊藤 秀美

愛知県がんセンター研究所　遺伝子医療研究部

超高齢化時代を迎え、高齢者のがん患者数は増加しています。その中で、前立腺がんは75歳以上の高齢者の男性がかかる第3位のがんです。低リスクの前立腺がん患者に対し治療しない経過観察という選択は、医療費の削減や治療による副作用を考慮すると妥当ですが、日本においては十分に検討されていません。今回ご紹介する研究では、地域がん登録データを活用し、高齢者の前立腺がんの過剰治療の可能性について評価しました。

研究の対象者は、MCIJにおいて生存率を推計するのに利用された都道府県がん登録に登録されている、2006-2008年診断の前立腺患者48,782人で、日本人口の33%をカバーするデータです。進行度、分化度、治療における欠損値は、多重代入法で補完しました。5年相対生存率(Edere II法)で算出し、5年相対生存率が100%以上であった場合、前立腺がんに関連する過剰死亡がないと定義しました。

図1に、診断時年齢を3つのグループ(余命10年以上の75歳未満、余命5年以上10年未満の75歳以上80歳未満、余命5年未満の80歳以上)に分けて、それぞれ進行度別限局、領域、遠隔転移)に5年相対生存率を示しました。領域、遠隔転移の前立腺がん患者の生存率はどの年代も100%を下回っているのに対し、限局ではどの年代でも100%を超えていました。そこで、限局前立腺がんに対象をしぼって、年齢グループ毎に、積極的治療をしたグループ(治癒的切除とホルモン療法)と経過観察のみで治療をしていないグループに分けて、5年相対生存率を算出しました(図2)。どの年齢グループにおいても、限局前立腺がんでは、治療をしてもしなくても、5年相対生存率は100%を上回っていました。また、経過観察のみの80歳以上の限局前立腺がん患者では、分化度によらず、5年相対生存率は100%を上回っていました。

80歳未満の前立腺がん患者については、余命を考えると、5年以上の観察期間が必要ですので、進行度が限局であっても、過剰死亡がないと結論づけられませんが、80歳以上の限局前立腺がん患者では治療しなくても過剰死亡がないことが、本研究の結果から分かりました。本研究の対象者で80歳以上の限局前立腺がん患者は2963名で、そのうち、252名(8.5%)が治癒的切除を、1478名(49.8%)がホルモン療法を受けていたことを考えると、少なくとも、80歳以上の限局前立腺がん患者58.3%は過剰治療を受けていた可能性が示唆されました。

本研究は、愛知県がんセンターのリサーチレジデントであった、九州大学泌尿器科の正岡寛之先生が取り組んだ研究です。この研究のように、全国がん登録を含め、地域がん登録のデータは、情報の粒度が荒くても、臨床上の明確な疑問に十分応えることができるのです。これからも、地域がん登録データを活用し、様々な視点で、がん対策のみならずがん医療の発展につながるような研究を進めたいと考えています。

最後になりますが、データ登録から提供までに関わってくださった、各都道府県のがん登録の皆様、全国がん罹患モニタリング集計を支える「全国集計と資料活用によるがん動向把握」班の松田智大先生をはじめ、分担研究者の皆様に、感謝申し上げたいと思います。

図1. 進行度別5年相対生存率

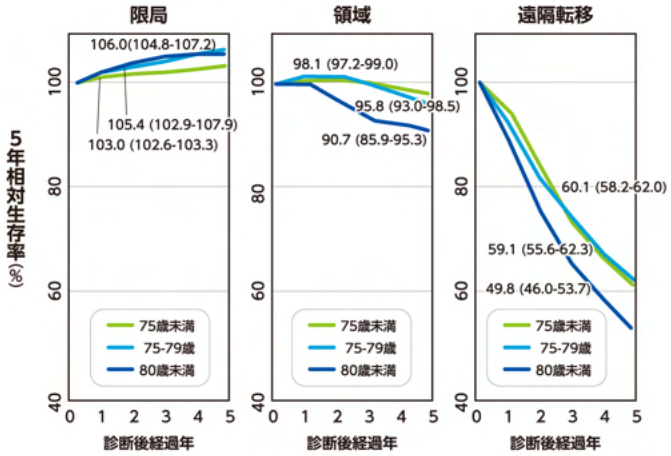
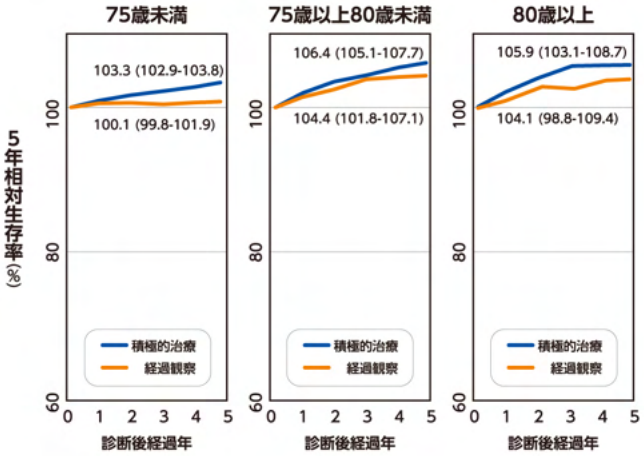
図2. 限局前立腺がん生存率（積極的治療群、経過観察群）